

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特設我々紙類検査局第七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可証第一四一四号
平成二十年十月一日発行（第四百一十一号第十号）

ホトトギス

十月号



俳句随想 〔三百十六〕

汀子

虚子は「季語」とは言わなかった。かならず「季題」と言った。「季語」という呼称を初めて用いたのは大須賀乙字であった。しかし連歌、俳諧、俳句において季を表す詩語は「季の詞」と呼ばれ中世の昔から存在した。乙字は「季感象徴論」の中で「具体的に俳句中に詠まれ季感を形成する中心的景物を季語とする」と新しく定義をしたのである。もしこの定義に従うならば「季語」の数は容易に増加するだろう。乙字は碧門であったが梧桐が「無中心論」を発表するとこれに強く反対し、更に反新傾向を標榜し、守旧派として俳壇に復帰した虚子に対しても批判攻撃を加えたが、乙字の季語論もその辺に端緒があったと考えられる。

一方「季題」は連歌において、一座に対する挨拶として発句に当季の景物を詠み込む作法が定着し「季題」が発句を詠む必須の条件となった。簡単に言うと「季題」は発句に起源を持ち、「季の詞」（季語）は付句に起源を有するのである。虚子が「季題」と言って「季語」とは言わなかったのも、俳句は本来発句であるという心によるのである。

旬日記 汀子

平成十九年十月一日 ロイヤル吟行会

ホテルには灯下親しむシャネデリア
周辺に秋を拾ひに行かれけり
更待の月に解きたる旅疲れ
十月六日 芦屋ホトギス会

青空に家居をひらひらと松手入
天高し手居の心消えてをり
十月七日 関西野分会

すんなりと来し秋ならずともよしと
濁酒話も提げて来られけり
十月七日 下萌旬会

水澄みりと来る秋ではなかりけり
すんなりと来る秋ではなかりけり
十月九日 大阪倶楽部

秋風にふと旅疲れあることを
澄む水の庭を見てゐる家居かな
穂をほどく芒に刻の移りけり
雲重き一と日芒の吹かれをり
雨降りて又止んで秋深くなる
初紅葉景色に消えてをりにけり
十月九日 綿葉倶楽部

秋晴の少し欠けたるところかな
露霜の光りはじめし芝と旅に
秋晴を今日のはじめし芝と旅に
秋晴の期待ほどくありにけり
十月十日 摩耶山俳句大会

深秋の心抱けなば山晴るる
一点の雲誘ふなく摩耶の秋
爽やかといふほかはなし山の風
十月十一日 清交社

この辺を統べし案山子となりにけり
鳥瓜父の忌日を近づけて

余白なき時間やりくり冷まじき
一つづつ会をこなし秋深し
快晴の山どことなく冷まじき
案山子にも時代の流れあることを
新しき道を迷ひぬ冷まじきを
十月十二日 工業倶楽部

冷まじや時間に追はれぬるばかり
冷まじや時間仰ぎたる早出
十月十三日 旬会と講演の会

実感のやうやく冬の近きこと
馬鈴薯の調理はてさて又同じ
冬近し昨日を遠くしたる日に
十月十四日 西の虚子忌

露草を染めあげてゆく初紅葉
峰寺の冷やかにして心地よく
十月十六日 祝「紫苑」千号

一色にあらぬ紫苑の咲きつぎて
一色にあらぬ紫苑の咲き増ゆる
紫苑咲きつぎて華やぐ朝かな
十月十六日 祝「あろうみ」八百号

あらうみにこぎ出づる船初明り
改修の工事やうやく秋の風
十月十六日 有恒倶楽部

山気にも包まれて薄紅葉
峰寺の歳月語る薄紅葉
体調をよりのへ行かん冬近し
薄紅葉よりのへまつてゆく山路
十月十七日 夏潮旬会

峰寺の帰路の色とし薄紅葉
爽やかに喜寿を祝はれをりにけり
木犀の香る所在は問はずとし
穂を上げて芒の未来はじまりし
十月十八日 クラブ合同

覚めるたび星を仰ぎぬ秋の夜
重陽に重ねて偲ぶ一忌日
啄木鳥の所在気づきしより山路

秋の宵とはふと淋しからざるや
十月二十日 九州ホトギス同人会

草の露これより里を抜ける道
露けしや励ます言葉なきまをり
渡り来しばかりの鴨の瘦せを
露の世の言葉足らざるまま別れ
十月二十一日 九州ホトギス同人会第二回

十三夜近づく夜々を旅にあり
星消えてゆく朝の露に濡れ
満天の星なほ消えぬ旅の秋
十月二十一日 九州ホトギス俳句大会 柳川

極めるといふこと秋の晴にあり
十月二十四日 野分会

通草口開けて青空戻りけり
旅終へてなほ余りたる秋の晴
照瑾なき秋の空とは今日のこと
濁酒提げて寄り道してをりぬ
十月二十五日 きさらぎ会

この晴を告ぐる羽音や鳥渡る
式部の実染めて紫雨上り
地へ落す影もむらさき式部の実
我が旅路今日東へ鳥渡る
この週を乗り切れればは冬近し
十月二十五日 時雨会

残菊が供華に勇りても余るほど
残菊に今日の予定の過ぎゆけり
大方は稲の刈られてある旅路
残菊を束ねたる香の立ちにけり
十月二十六日 年尾忌

君知るや火星輝きぬし秋を
追憶の中に秋霖あることを
十月二十七日 国民文化祭 徳島

皆楠の大樹見たしと露踏みて
十月二十九日 朝日俳壇 吉兆

集ひ得しとへ紅葉に早くとも
秋惜み我等集へば京晴れて

廣太郎句帳

廣太郎

十月十二日 祝 某佳人二十歳の誕生日

成人といふ爽やかな加齢かな

十月十三日 ホトギス社句会

星一つ瞬いてより冬近し

十月十四日 西の虚子忌

身に入むや昨日の試合あれなんや

露の句座昨日のそぞろ寒にこそ

十月十六日 草木瓜会

祝ぎの座は野菊の道を越えてより

人生の縮図集めて駅夜寒

野紺菊北の大地を騒めかせ

不夜城といふ明るさの夜寒かな

忌心に夜寒の帰路となりけり

十月十六日 悼 佐藤千代子様

予期せざる夜寒の星となられたる

十月十八日 登高会

冬支度とは髪の毛の長さにも

犬も猫も鳩も鴉も冬支度

浮塵子にも一毛ほどのたましひが

窓拭きのゴンドラに乗り冬支度

冬支度あの気に入りの上着どこ

十月二十一日 九州ホトギス同人会 大会

帰り花御花の庭といふ気品

朝寒く星消えてゆく静寂かな

うそ寒く太白星の輝けり

冷まじきベテルギウスの赤さかな

秋天に水の存問始まり

満天の星を蔵して秋高し

十月二十二日 朝日カルチャー若草句会

新蕎麦を手繰りて東男たり

野菊咲くこども富嶽の一部分

新蕎麦とを吸り信濃の一過客

野菊晴とは万象を鎮めたる

十月二十三日 若水句会

生活とは稲雀にも農家にも

櫛の実を灯明として古利かな

はじの実の黄金に山の暮れ初むる

うそ寒き噂の主はやはり君

うそ寒き高さに伸びて摩天楼

うそ寒く墨磨つてゐる佳人かな

十月二十四日 目黒学園句会

ピルの窓一つ一つに秋深し

吾子歩き初むる木の実を踏みながら

秋深し日の香を纏ふ濯ぎ物

ポケットといふ揺籃に木の実満つ

買うて欲しさうに松茸くねりけり

ぼつかりと雲はつこりと秋深し

十月二十六日 年尾忌

ぬかるみを二つ飛び越え年尾忌へ

十月二十七日 虚子記念文学館投句

年尾忌を修し拝する年尾像

十月二十九日 百夜句会

秋惜む君とのあの夜惜むかに

桐一葉日差拒んでをりにけり

冷まじやピルの先より来る夜

夜の帷葺き合うてそぞろ寒

平成十九年十月三日 祝 介弘清司様「さわらび」主御就任

品 格 は 一 誌 の 要 天 高 し

十月三日 一水会

西の賀に東の祝ぎに天高し

やや寒の厨は妻の牙城かな

十月四日 蕉心会

大川は江戸のまほろば鳥渡る

うそ寒き猫との会話ありにけり

曼珠沙華彼岸に色を移しゆく

萩に来てより昂れる羽音かな

川幅といふ秋水の三次元

相撲界いよよ台風席捲す

秋の雲高層ビルを嗤ふかに

海からの山からの水澄みにけり

秋日傘佳人いふことにしとこか

秋の蚊に好かれ人には嫌はれて

十月六日 日本伝統俳句協会関東支部大会

江ノ島の秋にサザンは似合はない

草紅葉湘南の風知り尽し

鳶の笛 弾き返して鯛雲

秋風を畳み白帆の下ろされし

十月十一日 土筆会

茸狩の達人といふ百寿かな

コスモスや千へクトパスカルの風

コスモスに風は一ト日の旅人かな

東京の風は 曲者 秋桜

雑詠

廣太郎 選

明易や近代俳句その夜明 樞原 稲岡 長
 竹落葉浮かべ由良川彎曲す 同
 一筋の発心淨し山法師 同
 虚子五十回忌欠かさず来て卒寿 相模原 木村享史
 虚子五十回忌を終へていま一人 同
 春風に乗り栄転をしてゆかれ 同
 一片に薔薇の迷路のほどけゆく 龍ヶ崎 今橋眞理子
 夏めいてゆく一本の梢より 同
 どの道も若葉の森へ消えゆきぬ 同
 逆転といふ快感や競べ馬 神戸 涌羅由美
 勝馬の鼻息のまだ落着かず 同
 競べ馬騎手とひとつに風を切る 同
 朴の花仰ぐ遠さに雨の雲 東京 川口利夫
 降りさうな空を透かせて朴の花 同
 夏めくや池上線の十一時 同
 明易し予定早めて発つことに 長岡 安原 葉
 現れし短夜の星別れ惜し 同
 夏草の山路もろとも削ぎし地震 同

生かされて白寿の句碑や聖五月 たつの 浅井青陽子
 青葉木菟来鳴と語り句碑除幕 同
 白寿とはひとごとの如きつき晴 同
 三四日見ぬ間に植田広がりぬ 福岡 松尾緑富
 これほどの田植の様を見たかりし 同
 植田見ゆかく町並のすぐ裏に 同
 二つ三つつけばつぶれし紙風船 福山 竹下陶子
 白焰の燃え崩れたる白牡丹 同
 湖に火柱立ちし雪起し 同
 閉づること考へぬ反り花菖蒲 香川 湯川 雅
 人拒む奥覗かせて木下闇 同
 葉の中に青鬼灯としての青 同
 同人の千人超えし虚子忌かな 東京 大久保白村
 阪神の首位で迎へし虚子忌かな 同
 春の風虚子の闘志を継ぐ人に 同
 夜の辛夷とは白を濃く闇を濃く 神戸 山田弘子
 少年に母の日の花舗ありにけり 同
 母の日の丹波の風に遊びけり 同
 花蜜柑咲きは今朝と電話来し 熱海 嶋田一步
 花蜜柑山の四五戸は一族と 同
 初島に大島も見え花蜜柑 同
 どくだみの見るだけならば花が好き 同
 ここからが蜜柑の花の香の範囲 同
 松蟬の鳴き揃ひふと止み揃ふ 同
 同 嶋田摩耶子

雑詠句評（九月号より）

千鶴子・むつみ・とほ歩

美奇・眞理子・中正

保佳・芳子・静龍

葉・憲明・廣太郎

眺めぬし花の雲へと我も消えん 長岡 安原 葉

「花の雲」という季題は〈花の雲鐘は上野か浅草歟 芭蕉〉をはじめ、咲き連なっている桜花を雲に例えて表現したもので、大きな景に深く感動した時に使われる、と筆者は考えている。

毎年の吉野山のお花見メンバーである作者は、一目千本の眺めに立ち、言葉で言い尽くせない程の感動を受けたのではないか。今年の吉野は全くの花盛りで、一片の落花もない、まさに花の雲だった。高僧であられる作者はさながら「花浄土」に遊ぶ心持で掲句を詠まれたのであろう。中七から下五にかけての流れるような調子は謡曲を思わせ、能舞台のシテが静かに消えて行く姿

を連想させる。（千鶴子）

筆者はどうしても吉野山を連想してしまうが、満開の桜を目の前にすると、一種独特の催眠術をかけられたような感動的な錯覚に陥ってしまう事がある。やはり日本人独特とも言えるのかも知れないが、桜の魔力には抗し難いものがあるのだろう。感動がすつきりと述べられている。（廣太郎）

月もまた花にさまよふ吉野山 神戸 山田弘子

汀子先生が「花の散りこむ谷」の花柱をご覧になりたくて作られた会にお相伴させて戴いているが、作者も勿論花に憑かれた一人である。今年の吉野の花は特に素晴らしく、一山花に埋め尽くされ、まさに絵巻そのものであった。花に愚かれた作者の心は平常心を失うほど花に心を奪われていたに違いない。だからこそ夜、吉野杉の間合いの月に美しさを称えつつ、月さえも余りの花の美しさにさまよっていると感じたのである。ここでの「月もまた」の「また」の一語の存在は大きい。作者の心が月に投影され、月が花にさまよっている姿こそ作者自身なのである。吉野の花狂いは簡単には収まりそうもない。（むつみ）

この時期の御投句はやはり花を詠んだものが多い。こちらははっきりと「吉野山」と特定しておられ、恐らく平成二十年四月に筆者も同行した時であろう。この年は図らずも満開の時期に行き当たり、感動しきりであったが、月までが花に魅せられている

天地有情

花子選

武士の又一人逝く花の雨
雨降れば四月八日はもうそこに
心手術して生かされし夏つづく
尚生きよ尚も生きよと薔薇紅し
亡き父の夢の言伝て明易し
短夜や下品下生の吾も仏
梅雨明や垂水一条光りけり
水無月の庭滝の辺にかそけく居
極楽も地獄も見えず春の雨
秋天にひび走る如吾が魂は
耕しつその畦路を行けと云ふ
名代なる筍村はすぐそこに
花は葉となる歩かねば学ばねば
山繭の風のごとくに眠りけり
正義派と呼ばれて老いぬ著ぶくるる
勃勃と老の闘志や去年今年
短夜の夢と知りつつ結びたし
短夜の涼しと思ふところまで

東京 稲畑廣太郎
同
大阪 薦 三郎
同
神戸 長山あや
同
樺原 稲岡 長
同
豊中 瀧 青佳
同
たつの 浅井青陽子
同
熊本 岩岡中正
同
福山 竹下陶子
同
八尾 岩垣子鹿
同

記念樹も茂ゆたかに迎ふ館
植系つけしばかりのものも庭若葉
夜を込めて着きし鎌倉朝ざくら
俳諧の絆しみじみ椿寿の忌
探梅や昔の風に会ひに行く
春の雪記憶のやうに消えてゆく
虚子五十回忌へ急ぐ嵐衝き
虚子五十回忌のゆ系に逢へし人
吹き込みし部屋の花を喜べる
夜桜へ宿の灯届く眺めかな
うすぎぬの水をすべらせ石遅日
母の日や大事がられず壮健に
生涯を大師の遍路句の遍路
野の霞より生れたる遍路かな
ペランダの今日咲いてみし時計草
海風はまつすぐに来る時計草
リラ咲いて札幌はなほ若き街
若き日の自分を置きぬ青芝に

長岡 安原 葉
同
金沢 藤浦昭代
同
大阪 佐土井智津子
同
相模原 木村享史
同
浜田 田中静龍
同
神戸 山田弘子
同
徳島 上崎暮潮
同
熱海 嶋田一步
同
東京 今井千鶴子
同

天地有情句評

汀子

梅雨明や垂水一条光りけり 榎原 稲岡 長

滝の一条の光に四季の推移を捉えた瞬間。

極楽も地獄も見えず春の雨 豊中 瀧 青佳

生きて行く中での平明な時間の推移。

耕しつその畦路を行けと云ふ たつの 浅井青陽子

天啓に耳を傾ける作者の謙讓。

花は葉となる歩かねば学ばねば 熊本 岩岡中正

花に心を奪われていた時間から得た活力。

正義派と呼ばれて老いぬ著ぶくるる 福山 竹下陶子

自分の生きざまを振り返り良しとする人生。

武士の又一人逝く花の雨 東京 稲畑廣太郎

日本で唯一個人所有犬山城城主成瀬正俊氏逝去。

尚生きよ尚も生きよと薔薇赤し 大阪 蔦 三郎

人生の節目。

亡き父の夢の言伝て明易し 神戸 長山あや

真摯に生きてゆく作者の父恋

(以下略)